

炉辺の枕(12)

『彼女たちの「戦後」—12 人の肖像／山本昭宏』

戦後民主主義を体現した女性たち

美賀多台 つだわたる

一番最近に読んだ社会科学の本を紹介します。西神ニュータウン 9 条の会の学習会に来ていただいたこともある神戸市外国語大学の山本昭宏さんが、戦後民主主義を解き明した本です。

これまでも社会科学系の本はたくさん読んできました。都市計画関係では『岩波講座 都市の再生を考える』シリーズ 8 巻や『都市政策の思想と現実／宮本憲一』『減災・復興政策と社会的不平等／田中正人』等、経済では『人新世の資本論／斎藤幸平』『AI(人工知能)と資本主義／友寄英隆』等、近現代史では『ピアノを弾く少女の誕生／玉川裕子』『日本と韓国・朝鮮の歴史／中塚明』『いくつもの岐路を回顧して／都留重人』であり山本さんの『変質する平和主義』も面白い本でした。

ここにあげた本はいずれもテーマは違いますが、私の中では日本の近現代史を記述しながら戦後民主主義を形成する要素を書いていると思いました。

文化としての民主主義

『彼女たちの「戦後」』は 12 人の女性の生き方、彼女たちの作品を分析しながら、山本昭宏さんが考える戦後民主主義を具体的に説明していると思いました。雑誌『世界』で連載されたものに手を入れて新書にしています。

彼は「文化としての民主主義」を提起しています。それは「政治・制度としての民主主義」だけでは言及できない「日々の営みや生き方の中に息づいている民主主義」と説明しています。

そしてむしろそれは「しばしば『戦後民主主義』と呼ばれてきた」という言い方に、私は共感しています。

1956 年生まれの私は、働き始めて労働組合や映画サークルの活動に関わる中で、戦後民主主義を体感しました。

山本昭宏さんは「戦後民主主義」の不十分さ(憲法と安保条約との矛盾、一国平和主義など)を色々な著書や講演でも指摘しています。私もほぼ同意していますが、それが理想的な日本をつくる方向に舵をとる力であると信じていました。

私は「戦後民主主義」が好きなのだと、この本を読んで改めて自覚しました。



12 人の女性たち

この本に書かれている 12 人は「黒柳徹子／戦後理想主義の残照」「土井たか子／憲法の子」「大橋鎮子／ひと手間の思想」「鴨居羊子／戦後の『全身表現者』」「田辺聖子／恋愛と『戦中派』の思想」「山崎豊子／恋と戦災」「角野栄子／青空の底の黒」「ゴーマン美智子／『走り方』を変えた女」「吉田ルイ子／Something we can do」「平野レミ／歓待の思想」「中山千夏／アマチュアのオリジナリティ」「吉永小百合／『戦後』のゆくえ」です。

もちろん、この中の好きな人から読んでいいのですが、今回は私が気になった人の項を紹介します。

まず黒柳徹子さんです。彼女は 1933 年生まれですが現在も『徹子の部屋』でテレビや芸能界から広く国民全体に向けて大きな発信を続けています。

彼女の持ち味の「一つ」として、永六輔の評価である 1960 年代の「戦後体験の共感のなさ」から 1970 年代以降に彼女が自身の戦前戦中戦後の体験、思いを語りだした（例えば『窓際のトットちゃん』『徹子の部屋』『ザ・ベストテン』で）変化をあげます。

その下でタモリの「新しい戦前になるんじゃないですかね」（2022）という言葉を引き出しました。彼はそれまでもそれ以後も、このような言葉は発していませんから、黒柳徹子の個性の反映と言います。

そんな彼女を「戦後日本の理想主義の残響がある」と評しました。

もう一人は吉永小百合さんです。

彼女の映画が「つまらない」という評価をもとに、彼女が体現したものを解き明かします。

初期に主演した『キューポラのある街』（1962）が持つ「戦後民主主義的な価値」と彼女の人生が「ピッタリと重なる」、そして『夢千代日記』やその後の原爆詩の朗読活動を紹介しながら彼女の「戦後が、ずっとずっと続いてほしい」という言葉を引用して人生をたどりました。

戦後の色々な意味の「理想」「夢」を体現してきたスター女優と評価しました。「つまらない」は、彼女に「理想」みて、現実と乖離しているその「理想」を陳腐と切り捨てるものと指摘しました。

彼女は 1945 年の生まれで、戦後と共に生きてきました。そして今でも「現役」と評価しています。それは「戦後民主主義」が傷だらけになっても生き続けている象徴です。

だから私は大好きです。

山本昭宏さんには「その2」を書いてほしいと思います。違う分野の女性たち、12 人の次世代の女性たちは「戦後民主主義」を発展させています。